

であらう。利瑪竇、艾儒略、南懷仁等の業績が日本の地理學にも大きな影響を與へたことは、著者が繰返へし述べて居られる通りである。この點から鮎澤さんの目は我國近世の地理學に注がれた。第三篇「江戸時代科擧者達の地理思想」がそれである。桂川國瑞、司馬江漢、本多利明、橋南谿、平田篤胤等がその調査の對象とされる。

こゝでも書誌學的方法が主として取られてはゐるが、併しこの篇で目につくのは、鮎澤さんが單にそれだけに止まらずかうした日本の先驅者達の地理思想を明かにし、その歴史的性格を把握しようとして居られる點である。問題がこゝでは洋學の側から取上げられたことも、この意味からであらうか。それはたしかに著者の研究態度の前進を物語るものだ。併し、妄評を許されるならば、著者の所論は、既に言はれてゐるこの時代の學問の歴史性を地理學の側から再認識し、それを補強する役目に止まつてゐるやうにも見受けられる。それも勿論重要なことであらう。だが、地理學史の研究が、特に、學問の歴史の上にも、又現代の地理學の上にも、何か新らしい光明を與へるものであつてもいいやうに思ふ。地理學といふものは、それに堪えるだけに古い傳統と、豊かな領域をもつた學問だからである。

かういへば、鮎澤さんは、見當ちがひの抗議だと嗤はれるかも知れない。本來歴史家である著者に、地理學を専攻した私がつけるこれは無理な註文である。いづれにしても、比較的手に入り難い雜誌などにも載せられた一群の勞作が一書に纏められて、この

やうに世に出たことは、そこから多くの恩恵を受けるであらう私だけの悦びではない。それは地理學史のみならず、廣くいへば近世日本の學術に思を致す研究者達に取つて、どうしても一度は挨拶しなければならぬ種類の本だからである。本書が成つてからも、熱心な著者は既に多數の研究を發表せられて居る。それ等が再び纏めて上梓される日を望んでやまない。締切に迫られて、匆忙の中に薙薙な紹介をしたことを、著者にも讀者にも深くお詫びする。(本文三〇五頁、圖版七葉、東京 日本大學第三普通部發行、定價參圓)〔室賀〕

A. G. Price, *White Settlers in the Tropics*, 1939, New York. (American Geographical Society Special Publication No. 23)

A. G. Price の白人熱帶移民に關する研究は既に *Geographical Review* 誌上に二、三發表されてゐるが、今回纏つた著書として出た。この種の研究は有名な E. Huntington を始め、G. Taylor 等新大陸の地理學者や、ドイツの K. Sapper 等により行はれて來たが、今 Price によつて一應體系づけることが試みられた。

此の書は三部に分れ、第一部は『白人熱帶移民問題の本質と歴史』と題し、問題の中心は白人が過去に於て何故熱帶移民に失敗を續けて來たか、現在はどうであるか、また將來に於ける究極の勝利を望み得るや否やの三點にありとなし、此の點に就いての

諸家の意見が不一致であることを説き、次に白人熱帯移民の歴史特に西印度に於けるイギリス人の失敗に就いて記してゐる。第二部は『白人熱帯移民の地方的研究』でフロリダ、クインスランド、西印度、コスタリカ、南アメリカ、アフリカ、パナマ等に於ける幾多の實例を記し、第三部は『白人熱帯移民を左右する諸要素』と題し、人種問題、環境要素、氣候適應と健康、衣食住、政治的及び經濟的諸問題等に就いて説き、最後に結論として第一部に於て提起した三問題に對する解答を與へてゐる。即ち將來科學の進歩に伴つて、白人熱帯移民は多方面に成功を收め得るといふやうな答をすることは易しいが『不幸にして此のやうな答はあまりにも單純過ぎる』となし、北クインスランドに於ける有望な例を除いては、熱帯アメリカ及びアフリカ等に於ける白人は漸次有色人の間に吸収されつゝあり、此の白人と有色人の混血は深刻な社會問題及び生物學的の不調和を惹起しつゝあり、最終の結果が廣範圍な熱帯環境に適應した新しい人種群の出現にあるかどうかは時が解決するのを待たねばならぬが、しかし科學者の手にもなすべき仕事の多々あるを論じてゐる。

Price の研究は別に白人の熱帯移民の將來に就て特に新しい方向を見出したものではなく、また其のやうなことは甚だ困難と言ふべきであるが、豊富な實例を以て此の問題に對する解決の材料を提供してゐるところに特色がある。元來或る人種の氣候適應に關する研究には何よりも長期の組織的な觀察が必要であつて、此の點に關し我が日本に於ても或る特定の地域、或る特定の集團の

移民に就いて永久的な調査を開始する必要がある、徒らに『時の解決』を待つべきでない、と考へられる。Price の研究はかゝる場合の大きな參考となる。尙此の書の末尾には R. G. Stone が附録として主として氣候適應の生活學的研究に關する論文を四つ載せてゐる。また文獻に就いては詳細な註解が加へてある。(淺井 得一)

### 慶州南山の佛蹟

(朝鮮寶物古蹟圖錄 第二)

### 朝鮮總督府

「慶州」と言へば我々は「佛國寺」石窟庵の名を思ひ出す。そしてその事は取りもなほさず彼の秀麗々そのものの如き佛を意味するだらう。それほどまでにこの端麗にして、そのふくやかな肌のもとには温い血が脈々と流れるかと思はれるばかりの妙體が我々に近かしく親しまれるのである。(朝鮮寶物古蹟圖錄第一所收)然しこの傑作も奇蹟として忽然と現れたものではない。そこにはこの秀像に連なる幾多の傑れた佛像が當然存すべく豫想されるのである。

然るに、この古都慶州邑の南方に、磊々たる赭巖と翠嶽の間に幾多の幽谷を包んで靜かに連互する南山こそは、この新羅人の精神と信仰とをそのまゝに、數多の寺址と靈像と寶塔とを傳へて今に及ぶ聖境であつたのである。

總督府に於いては既に早く大正の末年よりこの地の調査に着手